

Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ16 まえがき
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2019, 16, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/91415">https://hdl.handle.net/11094/91415</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## まえがき

本書は大阪大学歴史教育研究会の活動報告書の第16冊である。

大阪大学歴史教育研究会は、歴史学と歴史教育をめぐる「高大連携」を推し進めるための恒常的な討議・協働の場として設立された。毎月1度の例会は、2005年の設立以来2019年の3月で119回を数えるまでになった。この間多くの大学教員、研究者、院生、高校教員がこの会に関わり、発表や討論を重ねてきたことで、会の活動は年を追うごとに充実したものとなっている。

今年度も各分野の最新の研究動向や成果の紹介が揃うとともに、学習指導要領や入試改革を見据えた報告が主に西村嘉高氏（青山学院高等部教諭、文学研究科研究生）によって行われ、それをもとにした活発な議論が交わされた。また、日本学術振興会グローバル展開プログラム「国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較」（代表：堤一昭教授）の活動とも連携し、メンバーがカリフォルニアと中国で行った調査結果の報告も実施した。月例会以外の場でも、2015年7月に発足した高大連携歴史教育研究会や、堺市博物館をはじめとする外部組織と連携した活動を活発に展開した。

以上の研究活動に関する詳細は、巻末の活動記録を参照されたい。

さらに、今年度も大阪大学の歴史系の学生を中心とする大学院生によるグループ報告を行った。課題の設定にあたっては、今年度の受講生が中国・韓国からの留学生が過半数を占める（日本人3人、留学生5人）という例年にない状況になったことに鑑み、日本人と留学生の双方が対等な立場で参加でき、かつ双方にとって有益なものとなることを目指した。

このような目的で設定されたのが、「日中近世比較史」という今年度のテーマである。具体的には、かつて本研究会で書評会を開催し、その内容を高く評価した與那覇潤『中国化する日本』（文藝春秋、2011年、増補版が文春文庫より2014年に再刊）の47-51頁（文庫版59-64頁）に提示されている、「中華文明VS日本文明：対立する5つの争点」のうちひとつを選び、具体的なテーマを設定し比較を行うというものである。

【参考】「中華文明VS日本文明：対立する5つの争点」（與那覇前掲書前掲箇所より作成）

中国		日本	
A	権威と権力の一致	A'	権威と権力の分離
B	政治と道徳の一体化	B'	政治と道徳の弁別
C	地位の一貫性の上昇	C'	地位の一貫性の低下
D	市場ベースの秩序の流動化	D'	農村モデルの秩序の静態化
E	人間関係のネットワーク化	E'	人間関係のコミュニティ化

これらの対立軸のうち、グループ1は「D」を、グループ2は「A」を選択した。学生には半年間に渡る準備の上グループで口頭報告を行い、それをもとにしたレポートの作成を課した。本報告書にはこの2本のレポートを掲載しているが、いずれも力作なので、ぜひご一読を賜りたい。そうすれば、「専門とする地域や時代の異なる留学生と日本人学生が、それぞれの強みや持ち味を活かしながら共同作業を行い、一つの優れた成果を完成させる」という当初意図した目的が十分に達成されたことを、きっと実感していただけるであろう。

最後に、2018年度の活動にあたり参加・協力して下さった研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、あつくお礼を申し上げたい。

2019年3月 桃木至朗